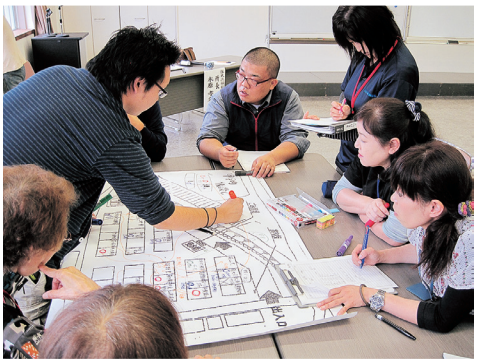
第２章

いろいろ役立つ！支え合いマップづくり
～支え合いマップの意義と効果～



平成27年度 講座の様子

平成28年度 講座の様子

第2章　いろいろ役立つ！支え合いマップづくり
～ 支え合いマップの意義と効果 ～

【 マップづくりから見出したいこと 】

マップづくりの最大の意義とは、様々な地域で暮らす住民一人ひとりが、安心かつ安全で豊かな生活を継続できるようにご近所ふくしの充実を図ることです。

マップづくりは、ご近所（30 ～ 80 世帯）の住宅地図を広げ、気になる人やその人に誰が関わっているかを線で結んでいき、地図上に住民の関係性を可視化していくことで、ご近所が抱える課題や解決へ向けた方法を見いだすことです。地域にはどのような福祉的課題があり、住民はどのように対処しているのか、その結果を基にこれからどのようなことに取り組んだらいいのかを考えるのです。このように、「問題」と「解決へ向けた方法」を合わせたものを「取組課題」と言いますが、マップづくりを行う人の一番の悩みは、取組課題が出てこないことです。ご近所内の気になる人や支援が必要な人（以下「要支援者」と表記）の現状を他人事としていては、取組課題は出てきません。加齢や障がいなどにより支援が必要な状態になったとしても、今よりももっと豊かに生きられるべきだと目標を高くすれば取組課題は出てくるはずです。

各地域で支え合いマップをつくっていくことによる地域福祉の推進組織へのもたらす効果は様々です。

【 マップが生み出す信頼関係 】

まずは、マップを作成することによってご近所の要支援者や支援につながっていない人たちが見えてきます。ご近所の中に要支援者がどこにいて、また、ご自身がどのような努力をしているのかが分かります。さらに、支え合いの実状も見えてきます。マップづくりをすればするほど、ご近所の関わりや要支援者の人付き合い、そして、その人の人柄や大切にしていることが見えてきます。たとえ要介護状態になったとしても、豊かに暮らしていける手立てを見出すことができるなら、人々の希望となります。

次に、マップを作成することによって、ご近所と地域福祉推進者のとの間に信頼関係を築くきっかけになります。1 回のマップづくりで取組課題を見いだし実践活動に展開することはハードルが高く、熟練した地域福祉の推進者でも技能や交渉力が必要なことです。したがって、回数を分けてご近所にお邪魔し、住民と前回の振り返りをしながら、聞き忘れたことを確認したり、職場に戻って職員間で検討したことを、住民に提案してみたりすることを繰り返すことによって、住民との距離が近くなり、住民が少しずつ、我々地域福祉推進者に信頼を寄せるようになります。

さらに、マップを作成することによって、町内会や自治会などの住民自治組織の信頼を得ることができます。町内会単位でのマップはあまりお勧めできませんが、町内会によっては、福祉の問題は要支援者自身や民生委員などの福祉推進者が解決するものという意識を持った住民自治組織もあります。しかし、要支援者の自助努力や民生委員、福祉推進者の支援だけで直接的に課題を解決したり、医療、介護、児童など地域に潜む多様な課題を解決に向け的確に専門知識を有する者につなぐことは困難なことと言えるでしょう。また、住民自治組織の運営役や事務局の人の中にも、様々な要因から自分の将来に不安を抱えている人は少なくありません。一緒にマップづくりを行いなが

ら、福祉は民生委員や福祉推進者のみが解決していくものではなく、地域で生活を共にする全ての人が、より豊かな生活に向け取り組む必要があるということを確認することができます。これにより、「じゃ、町内会は民生委員の活動をバックアップすればいいんだね」などと地域の中での役割を相互理解することができる可能性があります。

最後に、マップを作成することによって、主導的に地域福祉を推進するに当たって行政機関の協力も得られやすくなります。地域福祉を推進する仕事や業務は、住民を始め、行政や関係機関にはなかなか理解してもらえないことが多いため、地域福祉の従事者自身も自分たちの仕事を説明することが難しいと感じているのではないでしょうか。マップづくりから、ご近所の支え合いの実状を可視化し、「私たちは住民同士の“この（線で可視化されたつながり）”支え合いを応援しています」ということを示すことによって、行政関係者からは理解されづらい地域福祉を目に見える形での実線として理解してもらえるとともに、地域福祉を推進する我々の存在意義と価値を認知してもらえます。特にも社協においては、行政の揺るがないバックアップが社協事業を進めるに当たり、必要となりますので、マップづくりを通じての地域福祉推進の理念や実体的な住民支え合いを共有することで、相互の理解がより進み、より豊かな支援体制が構築されます。